

庄野潤三と十和田操（二）

——未発表の庄野書簡をめぐる——

Junzo Shono and Misao Towada (II) : The Newfound Letters of Junzo Shono

鷺 只 雄

SAGI Tadao

はじめに

私は先に「庄野潤三と十和田操（一）——未発表の庄野書簡をめぐる——」（都留文科大学国語国文学会「国文学論考」38号、02・3・15）と題して、新出の庄野書簡を十五通紹介したが、本稿はその続稿で同様に残りの十和田宛の庄野書簡二十四通を翻刻紹介する。前稿の十五通と合わせて、合計三十九通となり、これで私が入手した書簡は全て紹介したことになる。

書簡の内容については、別に庄野潤三論を予定しているので詳しくはそちらに譲ることとして、ここでは論点をいくつかにしぼって

簡約に述べたことをおことわりしておきたい。

凡例

- 一 書簡の現物を忠実に再現することを目指して翻刻した。ただし、漢字は新字とし、仮名遣いは旧仮名のままとした。誤字・脱字等も改めることはせず、特にめだつものについては「ママ」を付した。
- 二 促音はすべて並字の「っ」に統一した。外来語の促音・拗音はすべて小文字に統一した。
- 三 判読不能の文字については□で字数を示した。
- 四 記載順序は次の通り（イ・ホの区別は「」で示した）。

イ 通し番号 執筆年月日

ロ 消印 取扱郵便局名 受付時刻

ハ 葉書又は封書の別 航空郵便などの別 筆記用具 用紙と

枚数 記載年月日（イの本文末尾の年月日記載とは別に、

封筒のウラ、葉書のオモテに記載されたものをさす）

ニ 発信人住所

ホ 発信人氏名

ヘ 受信人住所

ト 受信人氏名

チ 本文

一

16 昭和33年8月15日

石神井 33・8・15 後0―6／葉書 ペン 八月十五日／練馬

区南田中町四五三／庄野潤三／目黒区鷹番町一八四／十和田操様

お手紙うれしく拝見しました。お暑い日にわざわざお出かけ下さつたさうで済みません。ガンビアに居ます間、度々お心のこもつたお便りを頂き、実に有難く存じました。お蔭様で二人とも無事帰つて来ました。子供たちも三人とも元気で、それが何よりうれしいです。長女は翌日から那須の高原学校へ当地から行き、（三泊四日）、その間、すっかりおとなしく、控え目な子供になつてしまつた長男に本を読んでやつたり、セミ取りについて行つてやつたりして一年間、淋しい思ひをさせた罪ほろぼしに精出してゐます。始めの日は

妙な顔をしてゐた次男（二才半）も、翌日からはすっかりなついて、相手にしてもらひにやつて来ます。母も幸ひ元気で、何もかも皆さまのお蔭と感謝してゐます。どうぞ一度、お出かけ下さい。ゆつくりとお話し出来るのを楽しみにして待つてゐます。

17 昭和34年2月26日

東京中央 34・2・26 後0―6／封書 ペン 便箋四枚 二月

二十六日／練馬区南田中町四五三／庄野潤三／目黒区鷹番町一八四／十和田操様

昨日はすっかり長い間お邪魔して、まだその上に大変御馳走になつてしまひ、御迷惑をかけました。しかし、久しぶりにハガキでなしにお眼にかかつてお話をすることが出来たので、やはり出かけて行つてよかつたと思つてゐます。どうも有難うございました。

まだ大事な話がたくさんあるやうな気がしましたが、一度に全部話したり、聞いたりするといふわけにも行かないことですから、またこの次、なるべくおつくうがらずに今度はどこかでもたお眼にかかるとにしたいと思ひます。私の方が不便なところですので、来て頂くのが大変ですが、新宿駅西口かららしい伊勢丹バスに乗つて頂くと、そんなに遠回りといふことはありませんから、どうか春の石神井の景色を見物がてらお出かけ下さい。三宝寺池まで行きますと、古びた趣のある沼が見られます。私は時々、自転車運動をかねて行つて、すぐそばの中学校で運動をしてゐる生徒を眺めたりしてゐます。

昨日はまたお土産まで頂戴し、恐縮に存じます。お客さんがあつ

た時にフタを開けてお酒のサカナに頂くことにします。昨日奥さんとお二人から伺ったお国の町の話は、大変面白いでした。何時か行つてみたいものです。

今朝、昨日お借りして帰った「濃飛人」の御作をゆつくりと一冊宛拜見して、丁度(六)まで読みました。もうこれで半分、読んでしまつたわけです。

私は最初、十和田さんに電報を打つて「カンゲキシテヨンデイマス スバラシイデス」と途中の感想をお知らせしたら、十和田さんも私のセツカチ(これは父譲りです)に苦笑されるだらうと思ひました。

本当にいい作品で、何とも云ひやうがありません。何もかも、始めからしまひ(これまで読んだところのしまひ)まで全部いいと思ひます。名作です。こんないいものはちよつと私の頭には浮びません。つまり、十和田さん一人しか書けないものだからです。

これは宝もので、それが人に知られない県人会誌に毎月連載されてあるといふのも、作者に似つかはしいことに思はれます。しかし、この形が実は一番いいと思はれます。それで、一旦活字にしておいてから、今度は一冊の本にまとめて世の中に残ることになるといふのも、心憎いことのやうに思はれます。つまり、十和田さんはこの仕事をされるのにも、十和田さん独特のやり方を自然に選ばれたやうに思ひます。

これは是非とも、この内容にふさはしい本にして世に示し、世に残したいと存じます。立派な作品ですから、努力すればしまひにはきつとこれにふさはしい本をつくつてくれる出版社が得られることを確信します。中勘助の本を岩波が出してゐたやうに、紙質も製本

も装幀も一級のものとして出したいと思ふのです。オプティミスティックだと思はれることでせうが、この作品の内容はそれだけのものを要求してゐると感じました。

全部拜読して、また今度お眼にかかつた折に、こまかな感心したところの話をしたいと存じます。

今日はこれにて。取敢ず、御礼まで。

二月二十六日

庄野潤三

十和田 操 様

18 昭和34年5月2日

石神井 34・5・2 後0―6／封書 ペン 便箋四枚／東京都練馬区南田中町四五三／庄野潤三(住所・氏名はゴム印)／目黒区鷹番町一八四／十和田操様

大変遅くなりました。此前、御一緒に武蔵嵐山へ遠足に出かけた折の写真が出来ました。(残りのフィルムをやつと写しましたので) 十和田さんが撮つて下さつた私のも、みなよくとれてゐます。二人が入つてゐる一枚が首尾よく(なかなかきれいに)写つてゐましたので、「これでいい記念ができた。よかつた」と喜んで居ります。日本文学史のアルバムに残る好箇のフィルムであります。(自画自讃、我田引水)

農家を背景にしたものも、よくとれました。河原の石が見えるのは、笑つてもらつたのですが、いい具合に笑顔をおさめることが出来ました。どうぞアルバムにおおさめ下さい。いい天気にも恵まれた、浮世ばなれの一日の思ひ出です。

二十八日に急に大阪へ行きました。大阪テレビ（もと私のゐる朝日放送から分れた会社で、今度再び朝日放送と一本になり、朝日放送大阪テレビといふ名前になりました）のディレクターの仕事ぶりを見て、「放送朝日」といふ雑誌にその感想・報告を書いてくれと頼まれたからです。長篇の仕事が出来ずに時間を空費してゐたときでしたので、気分転換に引き受けたのです。二十八日はまた実にいい天気で、汽車の窓から鯉のぼりが勢ひよく泳ぐのが見え、そのうしろは新緑の畑や山で、トランクに入れて持参した「クランフオード」の続きも読まずに、景色を見てゐました。

一昨夜、帰つて参りました。東京へ移つてもう五年半になりました。関西へ行つて、帰つて来ますと、もうこちらが家といふ気が持たします。

最初の三年ほどの間は、「大阪へ帰る」といふ気持で、さう云つてゐましたが、気がつくくと、此頃は「大阪へ行く」といふ気持になつてゐます。母も亡つて、ゐなくなつたせゐでもありません。それだけ東京に馴れてしまつたのです。石神井の家も、丸木小屋にいくら時代がついて来て、家からトウモロコシ畑へ下りる道も、道らしくなつた、といふことになるのでせうか。

今朝は一度眼をさまして、もう一度眠り込んだほんの一時間足らずの間に、亡つた父と兄と母の三人が一堂に会するといふ夢を見ました。母が重態でみんな心配していたら、母が歩いて起きて来るといふのです。心はどこを飛びまはつてゐますことやら。

また今度、天気の良い日を選んで、弁当もつて一日旅行に出かけませんか。今度は忘れずカツヲブシを入れておきますから。あの時サッポロビールは実にうまかつたので、忘れられません。

お仕事はその後、如何ですか。ご健筆を祈ります。

五月三日

庄野潤三

十和田 操 様

19 昭和34年7月12日

石神井 34・7・12 後0—6／封書 便箋五枚 七月十二日／
練馬区南田中町四五三／庄野潤三／目黒区鷹番町一八四／十和田
操様

御手紙有難うございました。

此間うち三十度以上のいい天気が続いて、十和田さんと同じやうに盛夏が一番好きな私は喜んでゐましたら、昨日からまたちよつと梅雨に逆戻りしたみたいです。早くすつかり明けてほしいものだと思つてゐます。

子供らは庭で水遊びをするやら、（此間です）麦茶をガブガブ飲むやら、西瓜を買つて来て早く切れ切れと騒ぎ立てるやら（長女が一番遅く学校から帰るのを下の二人が待ちかねて）、賑かでした。夏は活気があつて私は実に好きです。

新聞を見ますと、今年にニューヨークも、イギリス、フランス、ドイツなど何十年ぶり、（ドイツは百三十四年ぶりといふことです）の記録的な暑さが襲来してゐるさうですね。ニコデーム夫妻がヨーロッパのいくつかの大学から招かれて講演をするため、六月にガンビアを出発、今はその暑いヨーロッパにゐるので、私たちは「病気になるなければいいが。早く切り上げて帰つたらどうだらう」などと云ひ合つて、心配してゐます。

ニコディムさんは戦後ケニオンに招かれてアメリカに来てから初めてヨーロッパ旅行ですので、とても喜んで出かけましたが、友達やつぱりヨーロッパにゐるので、なつかしいのです。イギリスにもロンドンの近くに一人ゐて、よくニコディムさんは食料品を小包につくつて送つて上げてゐました。イギリスは肉が高いと云つて、よくマメに出来るなあと感じてゐました。

何しろ大分年を取つてゐますから、あまり暑いとやはり身体に應へるのではないかと心配です。しかし、友達と会へる喜びの方が大きいので、暑さはそつちのけで、久しぶりにポーランドの言葉で心ゆくまでしゃべつてゐることです。元気でガンビアに九月には帰られることを待つてゐます。

オックスフォード大学に留学中のジニイ（ケニオンで親しかつた学生）は、お母さんのゐるニューヨーク州のユティカの町に今頃はもう帰つてゐる時分です。彼はとても親孝行で、お母さんのことをいつも気にかけてゐましたから（イギリスからもよく手紙をくれました）今頃は喜んでゐるでせう。

ブルース・ケネディ（ジニイの友達で私たちにワシントンを案内してくれた）は六月にケニオンをめでたく卒業。卒業式の数日前に「これが私がガンビア局の消印で出す最後の手紙になるでせう」と書いて、手紙をくれました。多分、どこか更に上の大学へ進むのでせうか、それにはふれず、この夏は西部の方の国立公園で働くと書いてありました。そして、夏休みの終りごろにジニイとトムとイーストのどこかで会へると思つてゐるとありました。医科大学にゐるトムは、今年もハワイへ帰つて、今頃は農園で真黒になつて働いてゐるらしいです。

福原氏が私の本にふれて書いて下さつた文章は、お手紙で教へて頂くまで存じませんでした。有難く思つてゐます。今度お眼にかかると折に、どんな風に書かれてあつたのかお教へ下されば幸甚です。

本屋でゴーゴリの「死せる魂」を買つて来て、只今読み始めてゐます。たしかに面白い人ですね。私はこれまで「鼻」しか読んでゐるものがなかつたのです。「検察官」といふのも途中までしか読んでゐなかつたやうに思ひます。私は今度初めて（「得能五郎の生活と意見」の中で、十畑瑞穂が「ロシアで云へばゴーゴリ、アメリカで云へばマーク・トウエン」であるといふのを読んで、）ゴーゴリが身近に親しく感じられて来ました。チーチコフが田舎のマニローフ家を訪問する第二章をよみ終わつたところですが、何とも云へない面白味があります。こんなのにのびのびと書けたら、どんなにいいだらうと、書きあぐねてゐる私は羨ましくなりました。

天氣が落ち着きましたら、何処かへ御一緒に出かけたいと思ひます。私は何時でも明いてゐますので、十和田さんの氣の向かれた時、何時でも御連絡下さい。

七月十二日

庄野潤三

十和田 操 様

20 昭和34年9月5日

石神井 34・9・6 後016/封書 ペン 便箋二枚/練馬区

南田中町四五三/庄野潤三/目黒区鷹番町一八四/十和田操様

「新刊ニュース」といふのを開いてみますと、福田清氏が上林暁氏のことを書いた文章の中に、十和田さんの名前を見出しました。

なつかしい気がしましたので、別に大したことではないのですが、ちよつと切り取つてお眼にかけたくなりました。

その後、如何お過しですか。夏休みも遂に終り、いよいよ明日は学校（子供が）といふ時、「のんびりしたいいい夏休みだつたね」と長女に云ひますと、「よく遊んで、いい夏休みだつた」と子供も満足したやうに申しました。

下のチビは、夏休みの間、ケンカしながらも兄のあとにはばかりくつついて、兄がひとこと云へば、その通りのことを云ひ、兄が何かすればその通りやるといふ生活をしてゐましたが、よく遊んでくれた兄貴も新学期で登校、つまらなさうな顔をして寝つころがつてゐましたが、もう馴れたやうです。

大阪の兄からの手紙には、一陽展の出品作の最後の仕上げに奮闘してゐるとかいてあり、夏休み、林間学校と臨海学舎で絵を書いてゐるところの写真が二枚同封してありました。海でも山でも、といふところです。

これは湯原湖（岡山県？）の写真。

「生徒は山下清だといふ」とあります。お邪魔しました。

九月五日夕

庄野潤三

十和田操 様

21 昭和34年12月24日

石神井 34・12・25 後0—6／封書 ペン 便箋四枚／練馬区

南田中町四五三／庄野潤三／目黒区鷹番町一八四／十和田操様

ぐずぐずしていますうちに遅くなりました。この前、お話ししました東京新聞の切抜をお眼にかけます。私の方はスクラップしませんが、どうぞ。こういう記事が出るといふことも、嬉しい気持ちのものです。

○ 昨日は映画の試写を見に行きまして（フランス映画「大人は判つてくれない」——題はよくないのですが、案外、面白いので拾い物をした感じでした。）小島君と一緒にになり、れいの如く、また延々と六時から十二時半までかかつて話をしました。

○ 新潮文庫でヴァージニア・ウルフの「ダロウエイ夫人」を読み終りました。原文でよめば、もつと楽しむことが出来たらうにと思いましたが、時間がかかりますので——「クランフォード」のよう何ヶ月も——。手つとり早く翻訳で読んだのですが、なかなかいいものですね。女流ですが、しつかりと客観的に人をも自分をも見てゐる「大人の眼」が感じられました。華麗なイメージが豊富に出て来るのを、うらやましく思ひながら読みました。

○ ガンビアからクリスマス・カードがぼつぼつ来て、私たちを喜ばせてゐます。今日は散髪屋のジムから手紙とカードを一緒の封筒に入れたものが着きました。いい手紙で、何度も読み直しました。

○ 今日クリスマス・イヴで、私の家では別に何もありませんが、明日はお菓子でも買って来てみんなで食べようと云つています。家にいるのが一番だといつています。お正月は大阪へも帰らず、どこへも

行かずに家でのんびりするつもりです。私は小説を書くつもりですが、子供らとカルタやトランプをやつて遊んでしまうことになるのではないかと思つています。

○ ケニオンの同窓会報を送つて来たのを見ますと、「ガンビア滞在記」のことが紹介されていました。A NOVEL ABOUT GAMBIER といふ見出しで。ジャパン・タイムズに出た記事の切抜をランサムさん他二人ほどに送つたのですが、その切抜の記事を引用して広告してくれてありました。散髪屋のジムの手紙には「イングリッシュ^注・トランスレイションがないのは残念、アメリカで売れるだろうに。」とかいてありました。有難いことです。

「家内と自分とで、あなた方とあなた方の子供さんに会いに日本へ行けたらいいのだけれど」とも書いてありました。そしてクリスマス・カードに「子供のプレゼント」として、一ドル紙幣を三枚折り畳んで、セロ・テープで貼りとめてあつたのにはびつくりしました。こんなことは初めてです。

○ だらだらと長くなりますので、これで止めます。

では御家族の皆様、どうかいいお年をお迎へになりますように。

昭和三十四年十二月二十四日

十和田 操 様

庄野潤三

*注―(?)は原文のまま

22 昭和37年2月16日

田園調布 37・2・17 後0―6／葉書 ペン 二月十六日／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田 操様

ごぶさたしてゐます。先日は「春夏秋冬」をお送り頂き、有難うございました。十和田さんの「亀の子譚」は、大変不思議な話で、いい気持がしました。ゐなくなつてゐた間のことが全く分らないところがいいですね。さういふこともあるのかと驚きました。私もこの頃は、大抵家に居りますので、また一度、天気の良い日を見計らつてお出かけ下さい。この前、講談社のパーティーの時、大変お元氣さうな顔色になられたので喜ばしく存じました。函を入れかつ□たから胃もよくなつたのですね。小生の家内も昨年秋に膾炙炎でちよつと心配しましたが、その後葉が利いたらしく、すつかり元氣になり、毎日忙しく家のことをやつて居ります。では又。

23 昭和38年2月17日

渋谷 38・2・18 前8―12／葉書 ペン 二月十七日／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

お手紙大変嬉しく拝読しました。かういふお手紙を見ますと、やつぱり世の中にはいいものがあるといふ気がして、激励されたやうな心持になります。このレポートを捧げられた十和田さんの徳によるものと感謝いたします。丁度、その話に出て来る「リュニオン」の小説「ニューイングランドびいき」の入つた単行本が出来ました

ので、社の方からお送りしました。ご覧頂けるとうれしいです。御子息の入試も目前とのこと、どうか御合格を祈つて居ります。私のところはいいよいよ明日で、今日は私が日曜日から土曜日まで、一月から十二月まで（英語）書かせてみました。朝、六時起きして、青山まで行つてやるつもりです。「春夏秋冬」には是非お書き下さい。申しおくれましたが、先日は御馳走さまでした。奥さまによろしくお伝へ下さい。

24 昭和38年11月13日

登戸 38・11・13 後0—6／葉書 ペン 十一月十三日／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

昨日はとんだことで御迷惑をおかけして、まことに済みませんでした。もう少し待つてみておればよかつたのにと後で思ひましたが。近頃の学生にもいろいろあるといふことが分つて、これも一つの勉強でした。大分前に「いんでいら」で、「朝顔日記」を大へん面白く拝読しました。家内も十和田さんは永井龍男よりもずっと面白くいつて感心して居りました。今夜もう一度、出して来てよみました。それから、この夏に郡上八幡へ行つて有名な盆踊りを見物した話も、まだしてゐなかつたことを思ひ出しました。あの町に三日居りました。いい町ですつかり好きになりました。今度お眼にかかりました折に詳しくお話しします。お詫びかたがた、一筆しました。

25 昭和38年12月13日

登戸 38・12・13 後0—6／葉書 ペン／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

先日は久しぶりにお眼にかかれて愉快でした。小説、やつと書くには書いたのですが、都合で二月号に掲載ということになりました。昨日、「春夏秋冬」有難く拝受しました。十和田さんの柿と山吹の話、面白く拝読しました。いつもお柿を送つてくれる妹さんのハガキに心打たれました。「鼻紙一枚送らない」といふのも面白いですね。伊藤整氏のと河原直一郎氏のをよみました。里見弴が一冊しかない旧著を送つて来たといふのは、やはり文学をやる人といふのはえらいものです。近頃珍しい話と思ひました。もう今年も残り少なくなりました。小生、歯槽膿ロウが進んで、先日、歯を一本抜きました。悲しいものです。親から貰つた歯をひとつ抜くといふのは、では又。

26 昭和39年1月25日

登戸 39・1・25 後0—6／葉書 ペン／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

先日は御親切なお便りを有難うございました。拙作、お読み下さつて嬉しく存じます。「いんでいら」の松の臼の話、面白く拝読しました。きつとお母さんのやうに十和田さんも、この臼でついたお餅のお蔭で長生きなさることと思ひました。私はワセダの方は授業も終り、あとは試験だけです。生田の山も、団地のための整地工事

で、あのなつかしい山道がすっかりこはされてしまひました。木も一本残らず伐られてしまひ、ブルドーザーとダンブ・カーが占領してゐます。私は櫟の木の伐られた根つこを眺めてゐます。しかし、私の家から奥の方は、一步入ると昔のままの山林で、うれしくなります。此間は子供らと一時間半ほど歩きましたが、人に一人も会ひませんでした。いま、庭で暮からの続きの佐助が花をつけてゐます。では又。

27. 昭和39年7月22日

登戸 39・7・23 前8―12／葉書 ペン 七月二十二日／川崎
市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

お見舞も申し上げずにゐて、お許しください。もう快くなつて居られるだらうかと時々案じて居りましたが、ぎつくり腰といふのはどうしても長くかかるらしいですね。一昨日でしたか、東京新聞に尾崎一雄氏が何か拾ひかけた拍子に庭でぎつくり腰になり、這つて家まで入つて、小田原の外科医で荒療治してもらつて、といふ文章が出てゐました。私もきつといつか、やりさうです。いま浜木綿が淡紅色の花を開いてゐます。今年には冬に手入れがよかつた（ビニールと菰とを併用）せい、例年よりうんとよく咲きました。テレビごらん下さつたさうで有難うございます。どうぞお大事に。皆様によろしくお伝へください。

28. 昭和39年12月16日

登戸 39・12・17 後0―6／葉書 ペン 十二月十六日／川崎
市生田九〇八八／庄野潤三（住所・氏名はゴム印）／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

その後、お尋ねもせず失礼いたしました。お葉書、有難く拝見いたしました。「いんでいら」の随筆を拝読しました折、ハガキを出さうと思ひながら、そのままになつて居りました。小田嶽夫氏の会では、或はお見えになつて居られるのかと思ひましたが、ぎつくり腰の方は、もうすつかりおよろしいですか。私の方は息災にして居りますので、御安心下さい。生田の山も、一年以上ブルドーザーが動きまはつて、もう前の面影はなくなりました。さういふことをまた小説に書いて居りますので、そのうち、ごらん頂きたい思つてゐます。「ザボンの花」のやうなものを九月から書いてゐます。もう少して終わります。

29. 昭和40年1月1日

葉書（印刷にペン書き）「今年も」からの（二行）／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

謹賀新年

今年もどうぞよろしく。

生田の山へも一度お越し下さい。

昭和四十年元旦

川崎市生田九〇八八番地

庄野潤三

30 昭和40年8月11日

登戸 40・8・11 後0―6／葉書 ペン 八月十日／川崎市生

田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

お葉書ありがとうございました。大町さんの会では、きつとお眼にかかれると思つて、ワイシャツつけてネクタイで出かけましたら、十和田さんも青柳さんもお見えにならず、知らない人の間でどうも間がもたず、一時間ゐて、失礼しました。残念なことでした。八月の二日からいつも行きます外房の太海へ家族と出かけ、真黒に焼けて帰つて来ました。上の娘と中学の男の子と三人で、沖の赤旗から次の赤旗まで一往復「遠泳」をやりました。水のきれいな海で、浜にはせいぜい五十人から多い時で百人（子供も数のうちに入れて）の、静かな場所で、泳いでいる魚が見えます。仕事のこと考へず、ポカンと浮身したり、□たんな生活をしてゐましたが、いまはまた原稿用紙に戻つてゐます。庭の浜木棉は七夕の頃から咲き始めて、まだ花は終りになりません。萩が咲き出して、去年の八月に「夕べの雲」の書き出しを考へてゐた頃を思ひ出しました。もうすつかり腰がお丈夫ださうで、よろこばしく存じます。梅の実は今年は九十になりましたが、嵐で落ちて、収穫は五十でした。梅酒にしました。では、お大切に。またお目にかかりませう。

31 昭和40年8月31日

登戸 40・8・31 後0―6／葉書 ペン 八月三十一日／川崎

市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町一八四／十和田操様

御息のお嫁さんが決られた御様子で、おめでたうございます。これからまたお賑かになるわけですね。先日はおハガキ有難うございました。あの写真（紅白の）の男の子は可愛いですね。私たちもだんだんと子供が大きくなつて来て、この夏も太海へ行きましたが、子供連れの家族を見ても、みんなたいがい、小さい子供ばかりで、つまりまだ親が若いので、「こちらも年を取つたんだなあ」と思ひました。そのうち長女をヨメに出さなくてはならない時が来るのかと思ふと、まだ実感が湧きませんが、いやですね。いつまでも子供でワイワイ云つてくれるといいと思つたりします。昨日は家内と徹夜で、「戦争の真の終り」といふポーランドの映画をみました。皆様の御健康を祈り上げます。

32 昭和41年10月1日

登戸 41・10・2 後0―6／封書 ペン 便箋四枚 十月一

日／川崎市生田九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番町二丁目十八番十七号／十和田操様

先日は大町氏のお宅にて久しぶりにお眼にかかれてうれしく存じました。その折、お話のあつた「父の三十才の年に生れた」といふことですが、やはり私の（その「桃李」を書いた時の）記憶違ひでした。

晩年に父が自分でノートに認めました年譜によりますと、次のや

うに書かれて居りますので、御参考のためにお知らせいたします。

大正六年 三十才（明治二十年四月十九日生）

丁度この頃に石谷熊吉氏と浅野校長（大阪桃山中学校）から推薦されて、二月に帝塚山学院小学校長となる。その年に大毎海外留学生募集に応じて、英文で「大学に新聞科を設けよ」和文で「感化救済事業の必要」を論じて、約百人中の十二人位の中に入り、口頭試験に出て、自分はよく出来たと思つたが、合格しなかつた。然しその時は帝塚山学院長になつていたので、実はよかつた。

どちらになつても良かつたが、既に三十才であつたから、年令の上で大毎の条件には達していなかつた。

四月に開校して黒い制服に、女子はエビ茶の帽子だつたので、直ぐに贅沢学校という渾名がついた。

大正九年 三十三才

帝塚山東町に新築移転する。（注、□の木の舎宅^{マヤ}から）吉川平二氏の設計による。附近に二軒しか無く、裏は田であつたので淋しかつた。周囲にプラタナスを植え、赤い瓦の屋根にして赤蝸房という雅号をつけたりした。

大正十年 三十四才

春二月に潤三が生れた。家内は殆ど女中をおかずにやつた。女中をよう使わんである。又儉約と両方の意味であつた。

此頃まで五年間程一週に三回、川口の商業夜学校に教え^{マヤ}に行つた。

以上の通りです。どうぞ宜しく願ひします。

「春夏秋冬」の御作、大へん面白く拝読しました。かういふものを読むと、いいなあと思ひます。何べんもお茶をいれてくれるをばさんの話が、そこまででと切れるのですが、あとに思ふままにならないう人生の怖ろしさ、さびしさが残ります。

「げちゃげちゃ」

と笑つた、といふところでは、シャッポを脱ぎました。

全くこれは人の意表をつくもので、ほかの者では真似ることの出来なものです。驚きました。

眉毛のけの長くなつたのをさういつて大事にするといふことは、初めて知りましたが、なるほどいいことのやうに思ひました。確かに十和田さんにはさういふ眉毛があつたと前から印象に残つてゐます。

台風で瓦屋は大繁昌らしく、未だに屋根はいたんだままですが、いい具合に秋候のおだやかな日和が続いてゐます。植木屋だけは、自分のうちのを後まわしにしてゐるといつて、この間、来て、半日ばかりでかいだ木を起して、つつかひ棒をしてくれました。では又、お目にかかれる折をたのしみにしてゐます。

十月一日 庄野潤三

十和田 操 様

33 昭和43年1月4日

千歳 43・1・4 後0―6／葉書 ペン 一月四日／川崎市三田五ノ九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番二ノ一八一七／十和田操様

お葉書ありがとうございました。あかね書房の、解説をお書き頂いた「ザボンの花」は、来月（二月）十五日に発売になります。暮に写真を（解説の中に入れる）取りに来て、さういふことでした。もうすぐなので、大変たのしみにして居ります。十和田さんの文章で花を添えて頂いて、私はこれほど嬉しいことはありません。幸運といふべきです。筑摩の日本短篇文学全集第一回、佐藤・芥川・井上集の附録の座談会（「短篇小説を語る」）で伊藤整氏が十和田さんのことにならふれてゐます。お目にとまりましたか。一度お遊びにお出でになりませんか。天気の良い日がこれから続きます。梅の芽が少しづつ目立つて来ました。

34 昭和43年2月28日

登戸 43・2・29 後0—6／葉書 ペン 二月二十八日／川崎市三田五ノ九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番二丁目一八一—七／十和田操様

佃煮、お召上り頂き、うれしく存じます。地方の親戚へ送つても、とにかく早く着くので、「いい店だ」とうちで好評です。「ザボンの花」の解説で、私の父母のこと、また家内の小さい時に亡くなりました父のことまで書きとめて頂き、有難うございました。いい供養になつたと二人でよろこんで居ります。「やつぱり十和田さんは詩人だから」といつて、独特の感じかた、独特の表現、そのこまやかさに感心いたしました。私には一生のよき記念となります。子供も「面白い」といふので、生田小学校へ一冊、寄贈しました。家内は目下子供（次男）の読んでゐた十和田さんのトルストイの御本

を借りて、感嘆の声を放ちながら、読ませて頂いて居ります。梅が七分咲きです。雪で少しいたためつけられましたが。沈丁花はもうすぐ咲きさうです。御礼まで——。

35 昭和43年6月19日

千歳 43・6・20 後6—12／葉書 ペン 六月十九日／川崎市三田五ノ九〇八八／庄野潤三／都内目黒区鷹番二—一八一—一七／十和田操様

「戸の前」をはじめて拝読（「現代文学大系」で）しました。これは傑作ですね。この一篇で、後世の読者は十和田さんを畏怖し、憧れる者がきつと出て来るだらうと思ひました。「オケチヨビンちゃん」に鞆を持つてゆかせる話、奥さんとの会話、オーフル論考、Tポーン会食席上の受取らないの辞、帰つてからの奥さんとの会話、すべてをかくしく、ユニークで、人の世の夢幻の美しさをたたへてゐます。かういふのが、ほかにもどつさりあるのですか？

注—正しくは「戸の前で」

36 昭和44年12月29日

登戸 44・12・29 12—18／葉書 ペン／川崎市三田五ノ九〇八八／庄野潤三／TEL52都内目黒区鷹番二の一八一—一七／十和田操様

名古屋の守口漬を頂き、有難うございました。毎日、食卓におい

て、たのしみにおいしく頂戴して居ります。御礼を申し上げるのが遅れてしまひ、お許し下さい。なかなかいい味ですね。「ザボンの花」の解説の遠足の昼弁当のところを思ひ出しました。作品集の校正（再校）も先日、渡しまして、あとはいいよ出版の二月を待つばかりです。伊藤整さんに読んでほしかつたのに、思ひかけぬことで、私もがっかりしました。さびしいことです。しかし、きつと天上で喜んで居られることでせう。お勤めの御息（オケチョビンさん）もお正月でお帰りでせう。よいお年をお迎へください。御礼まで——。十二月二十九日夜。

37 昭和45年元旦

葉書（印刷にペン書き）「うれしい年」以下の一行。／〒152都内目黒区鷹番二ノ十八—十七／十和田操様

謹賀新年

うれしい年です。二月が待たれます。

昭和四十五年元旦

川崎市三田五ノ九〇八八

郵便番号二一四

庄野潤三

38 昭和47年7月31日

登戸 47・7・31 12—18／葉書 ペン／〒214川崎市三田五ノ九〇八八／庄野潤三／〒152都内目黒区鷹番二—一八—一七／十和田操様

お葉書ありがたうございました。（七円の葉書でした。私もうつかりして友人のところへ古い葉書で本の礼状を出し、「あの葉書、七円でした」といはれ、気が付き、それでなければ片っぱしからそれで出すところでした。お笑ひ草まで）記代さんとは、いい名前をつけられました。本当に可愛い名前です。どんなにかお賑かでせう。私の方も、娘がいつもおぶつて来ます。九月には二人目が生れる予定です。「新潮」どうか気楽に好き勝手に書き下さい。前田君は、なかなか有能な編集者です。皆様御大事に。

39 昭和52年6月15日

登戸 52・6・15 12—18／葉書 ペン 六月十五日／〒214川崎市多摩区三田五ノ九〇八八／庄野潤三／〒152都内目黒区鷹番二—一八—一七／十和田操様

お葉書有難く拝見しました。ああいふ書評しか書けない人がゐると思つて、私も辛抱してゐます。外側から見ただけで、中身に融け込めないと、どうしてもああいふ感想になるのだらうと思ひます。幸ひあの二日前に東京新聞（夕）に阪田寛夫がいい文章を出してくれましたので、喜んでおります。その末尾は「もし作者がここまで話を聞きこまなければ、この畏敬すべき老人はこれだけの宝をかかえたままで、彼の信じていない「あの世」へ行つてしまはずであつた」といふのでした。梅雨に入りました。近年になつて梅雨は本当にいいものだど、やつと分つて来ました。で、ムラサキツユクサが咲いてゐます。では、どうぞお大切に。御礼まで、

まず最初に1〜39の書簡について簡単な注を施すことから始めることにしたい。但し、前述のように別に庄野論を用意しているので、ここではごく大まかなところにとどめておきたい。

庄野氏の職歴は、昭和二〇年一〇月、大阪の府立今宮中学(旧制)の教員となり、のち大阪市立南高校に転じ、昭和二六年九月、朝日放送に入社、教養番組制作を担当。二八年九月、同社の東京支社に転勤、一家をあげて上京、東京練馬の新築の家に住む。三〇年一月、「プールサイド小景」(昭29・12「群像」)により第32回芥川賞を、小島信夫とともに受賞、同年八月に朝日放送を退社し、作家生活に入る。三二年九月から一年間、ロックフェラー財団の招きでアメリカに留学することになり、人口は六百人、地図にはのっていないオハイオ州ガンビアのケニヨン大学で客員研究員として夫人とともに一年間暮らした。その間、三人の子供たちは、留守宅に夫人の母が来て世話をみてくれた。三六年四月、川崎市生田に転居し、終の棲家となる。

書簡の1〜4、6は朝日放送社員としての番組制作にかかわっているものである。

7の「十和田」は、秋田の酒と料理を出した店で、新宿角筈二丁目にあった。「小島」は小島信夫、「吉行」は吉行淳之介。

8の「井伏」は井伏鱒二。10の「秋沢三郎」は小説家、ジャーナリスト。東大英文出身でサンケイ新聞文化部長を勤めた。小説に、伊藤整や上林暁らの同人雑誌「春夏秋冬」(昭35・4・25〜49・

5・25、全14号)に発表した「停年」などがある。

11の「道」は五月に公開されたイタリア映画で、見世物大道芸人を演じたジュリエッタ・マシーナとアンソニー・クインの迫真の演技による名作。

12の大阪の「兄」は、庄野英二。潤三の次兄で、児童文学者、代表作に「星の牧場」などがある。「群像」は講談社発行の月刊文芸雑誌で「新潮」「文学界」と並んで、現代日本の代表的な雑誌の一つ。

13の隣人エディワラさんの事は「詳しく一部始終を書いて読んで頂くつもり」というのは、『ガンビア滞在記』(昭34・3・5 中央公論社)となつて帰国後の翌年に発表される。

14の「判任官の子」は十和田操の代表作で、昭和一二年七月の「文学生活」に発表。「三人の子供」の生年について記しておく、長女は昭和二二年一〇月生まれ、長男は二六年九月に、次男は三二年二月にそれぞれ生まれており、この世話にあたられた祖母(夫人の母)の苦勞はさこそと察せられる。

17の「濃飛人」は岐阜県人協会発行の月刊誌で、作品は「回顧詩紋帖」(昭32・9・15〜34・12・15)と思われる。

18の「御一緒に武蔵嵐山へ遠足に出かけた」というのは、三四年四月に、十和田操と武蔵嵐山、越ヶ谷に遊んだことをさす。

同じく18の「放送朝日」の依頼原稿というのは、作家の眼でみたラジオ・テレビという特集で、庄野氏の他に、京都伸夫、開高健も執筆している。庄野氏のものには「三人のディレクター」(放送朝日)昭34・6・9〜19頁)として掲載。同じく「亡った父と兄と母の三人が一堂に会する」というのは、長兄鷗一が昭和三二年一

月に死去、父貞一が二五年一〇月に、母春慧が三一年四月に死去していることを受けている。

19の「福原氏の文章」というのは、英文学者福原麟太郎「私の古典」1 「クランフォード」(昭34・6・29「週刊文春」37頁)であろうと思われる。

20の「福田清人氏が上林暁氏のことを書いた「新刊ニュース」の文章」というのは、福田清人「私の作家交友録② 上林暁氏の巻」(昭34・9「新刊ニュース」8〜9頁)をさす。

21の「小島君」は作家の小島信夫。

22の「春夏秋冬」は文芸雑誌。伊藤整・上林暁・十和田操・福田清人ら一六名の同人で創刊した季刊誌で、編集は全一四冊の中、一〇冊を十和田操(和田豊彦)が担当している。10の注参照。

出発時の平均年齢が五六・五歳、という数字が示すように、一発あてようというようなさもしさとは無縁の、真に書きたいことだけを書くという円熟の世代の同人雑誌として期待されたが、回を追うごとに発行の回数が減り、加えて蒲池歎一・坂本越郎・伊藤整と会員の死が相次ぎ、一四年間に一四冊を刊行して終刊となった。ただし、操「亀の子譚」は同誌一四冊の中、どの号にも掲載されていない。庄野氏のカンチガイかと思われるが、現在のところ未詳。

23の「単行本を送らせました」というのは、『旅人の喜び』(昭38・2 河出書房新社)と思われる。

24の「いでいら」、「朝顔日記」未詳。

25の「都合で二月号に掲載」となった小説は「鉄の串」(昭39・2「群像」)であろう。同じく「柿と山吹の話」は「不如意の庭」(昭38・11・20「春夏秋冬」9号 23〜24頁)。

28の「ザボンの花」のやうなものを九月から書いて「いるというのは、「夕べの雲」(昭39・9・6〜40・1・19「日本経済新聞」)をさす。

30の「大町さんの会」は未詳。「青柳」は、青柳瑞穂か。

32の「大町さんのお宅」も30と関係があるかと推測されるが未詳。

「春夏秋冬」は11号の「まゆ毛」(昭41・9・20 16〜18頁)をさす。

35の「戸の前で」の初出は「小説新潮」(昭26・7)である。

36の伊藤整の没年は昭和四四年一月一日である。

38の「娘がいつもおぶつて来る」のは、庄野氏の初孫で今村和雄、昭和四六年七月生まれ、「九月」に生まれた二人目は、今村良雄。

「新潮」どうか気楽に好き勝手に書き下さい」というのは、恐らく庄野の推薦で「新潮」から執筆依頼状が来てのことをさすものに違いない。これは恐らく、たまたまその露頭が一つ見られたというべきであつて、水面下に隠されている氏の十和田に寄せる思い入れの深さに思いを致すべきであろう。

39の「ああいふ書評」は未詳。「阪田寛夫のいい文章」は書評で、「人生の宝」を聞き出す——庄野潤三著「引潮」(昭52・6・11「東京新聞夕刊」三三三三三)。

三

では次に簡潔に、この書簡の特徴について四点を指摘しておきたい。

まず第一に、二人の交友のありよう——そこにおける尊敬と信頼の深さがあげられるであろう。全幅の信頼を置いた知己の間柄——

稀に見る美しい人間関係を我々はそこに見出すのである。

次に、操作品に対する徹底した玩賞ぶり——古い言葉に言う舐犢の愛という語がピッタリするような、手にとり、ためつすがめつ、感嘆の声を発するその様は正しく心からの敬愛と言うにふさわしいであろう。

第三に、にもかかわらず殆ど社会的には認知されていなかった操の文学に対して、あらゆる機会をとらえては孤軍奮闘、その作品を賞揚し、執筆の機会を得られるように努力する様子は友情の深さというような個人的な感情を超えて、日本文学の豊かさのためにはそうでなければならぬと信じた者の潔さがあると見られるであろう。

第四には、「夕べの雲」をはじめとして、作品についてもらされた作者自身のさまざまな発言が、今後の庄野文学理解の課題として残されていよう。